
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ
No.82

ロシア史研究会 2011年度大会案内

青山学院女子短期大学で10月22日（土）、23日（日）に開催

すでにお知らせしたように、ロシア史研究会 2011 年度の大会は、10 月 22 日(土)、23 日(日)の両日に青山学院女子短期大学で開催されることになりました。

大会プログラムの概要をお知らせします。なお、大会にかんする事務的な事項でのお問い合わせは、[jssrh-office\(at\)tufs.ac.jp](mailto:jssrh-office@tufs.ac.jp) 宛にお送りください。



(青山学院間島記念館(旧図書館) 村知稔三撮影)

大会プログラム

第1日目 10月22日(土曜日)

自由論題報告 10時00分～11時55分

<A会場> (北校舎2階 N204教室)

報告1 (10時～10時55分) 左近幸村 (学振海外特別研究員) 「日露戦争後の義勇艦隊と東亜汽船：航路網の再編に見るロシア帝国の東と西」

コメンテータ：イーゴリ・サヴェリエフ (名古屋大学)

報告2 (11時～11時55分) エリーナ・ドミートリエヴァ (岡山大学・院) 「在満白系ロシア人中学校への「新学制」導入問題：白系ロシア人社会と「満洲国」文教部との対立」

コメンテータ：長縄光男 (横浜国立大学名誉教授)

<B会場> (北校舎2階 N205教室)

報告3 (10時～10時55分) 藤沢潤 (東京大学・院) 「ブレジネフ外交の岐路—旧東独史料からみる1970年代ソ連外交」 コメンテータ：未定・交渉中

報告4 (11時～11時55分) 瀧口順也 (北海道大学スラブ研究センター・非常勤研究員) 「ボリシェヴィキ党大会 (1927-1934) : スターリニズムの演出と舞台装置」

コメンテータ：石井規衛 (東京大学)

昼休み (12時～13時30分)

オルガン・コンサート (12時～12時30分)

湯口依子 (青山学院女子短期大学講師) (曲目未定)

午後 共通論題Ⅰ 13時30分～16時30分 (北校舎2階 N202教室)

「ロシア農奴解放150年：「大改革」の歴史的意義をめぐって」

報告 吉田 浩 (岡山大学) 「農奴解放の開始から大改革へ—政治社会史的考察」

青島陽子 (愛知大学) 「大改革期の農民観—初等教育問題を手がかりとして」

Игорь А. Христофоров (ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所) 「Отмена крепостного права и налогообложение деревни: европейские идеи и российские реалии (農奴制廃止と農村の課税—ヨーロッパ的理念とロシアの現実)」

コメンテータ 竹中 浩 (大阪大学) 司会 鈴木健夫 (早稲田大学)

今年、ロシアで領主農民の解放が1861年に実施されてから150年目にあたる。周知のように、この農奴解放に続いて1863年に御料地農民の改革が、1866年に国有地農民の改革がおこなわれ、そして改革の波は、ほぼ同時期に、地方行政、都市行政、司法、教育、検閲、軍事等に及んだ。1860年代を中心とするこの諸改革は、20世紀初頭の自由主義者によって「大改革」(偉大な改革)と総称され、さまざまな研究が公表された。ソ連期にも「大改革」の研究は一定の視点から着実に進展したが、新たな光が当てられるようになるのはゴルバチョフのペレストロイカ、そしてソ連邦解体のあとである。「歴史の見直し」のなかで、ピョートル改革およびストルィピン改革とともにロシア史が経験した「ペレストロイカ」として「大改革」が積極的に評価され、活発な議論が展開された。このような動きは欧米の学界にもあった。そしてソ連

邦解体から 20 年になる今日、一時期の興奮した空気は後退し、冷静な視点から、若い世代による研究の深化が進んでいる。「大改革」後のロシアの社会・帝国についてさまざまな新しい歴史像が提出されているなかで、モスクワからいま注目のフリストフォロフ氏を迎え、独自の研究蓄積をもつ日本側からの吉田浩、青島陽子両氏の報告とあわせ、「大改革」の実態と本質を新たに究明し、その歴史的意義について活発に議論する場にしたいと考えている。(鈴木健夫)

総会 16 時 30 分～18 時

懇親会 18 時～

第 2 日目 10 月 23 日 (日曜日)

パネル 10 時～12 時 30 分 (北校舎 2 階 N202 教室)

「日露戦争とサハリン島」企画代表者：原暉之 (北海道情報大学)

報告：天野尚樹 (北海道情報大学)、田村将人 (北海道開拓記念館)

昼休み 12 時 30 分～13 時 30 分 (日曜は学内食堂閉店。ただし正門以外に「幼稚園・短大門」が開いており、青山通り・表参道に出られる)

午後 共通論題Ⅱ 13 時 30 分～17 時 (図書館棟 4 階 L402 ミニホール)

「戦後 66 年シベリア抑留を問う－急がれる公文書開示と実態解明」

司会：富田武 (成蹊大学) 「抑留研究の現段階とアルヒーフ文書」(仮)

C. Кузнецов (イルクーツク国立大学教授) 「О советской политике в отношении японских военнопленных и интернированных (日本人捕虜・抑留者に対するソ連の政策)」

阿部軍治 (筑波大学名誉教授) 「抑留者たちの“三重苦”：寒さ、飢え、過酷な労働」

村山常雄 (元抑留者、交渉中) 「シベリアに逝った人々を記録し、記憶する」

小林昭菜 (法政大学・院) 「ロシアの公文書に見るシベリア民主運動」

栗原俊雄 (毎日新聞記者) 「引揚げ後の抑留者たち：苦難の後半生」

本企画は、昨年 6 月の「シベリア特措法」成立を受け、同 13 条に謳われた実態解明と歴史記録整備の一端をロシア史研究者が担う、その最初の試みである。もとより、この問題の解明は日本史研究者や旧ソ連の研究者との協力を不可欠とするものであるが、尾上正男、相田重夫、藤田勇のような抑留体験者を先輩に持ちながら取り組んでこなかったことを反省し、旧ソ連アルヒーフ文書の収集・分析をもって貢献しようとするものである。パネリストは、ロシアから著作(翻訳)もあるクズネツォーフ博士を招き、自力で 46,300 名の抑留死亡者名簿を作成した元抑留者の村山常雄さん、若手のジャーナリストで著作もある栗原俊雄さん、ロシア文学者で抑留問題に早くから取り組んだ阿部軍治教授、モスクワ留学(抑留研究)から帰る院生の小林昭菜さんにお話し、今回は研究の現段階と課題を明らかにする。時間が限られているので、事前のペーパーはむろん、当日は参加者に役立つ資料集を用意する。(富田武)

<ロシア史研例会報告 2011年5月>

合評会・森永貴子『イルクーツク商人とキャフタ貿易—帝政ロシアにおけるユーラシア商業』北海道大学出版会、2010年

報告者：塩谷昌史氏（東北大学）の書評；森永貴子氏（立命館大学）のリプライ

日時：2011年5月28日（土）午後3時から 会場：東京理科大学森戸記念館第4会議室

[報告要旨] 塩谷昌史 5月28日に、ロシア史研究会の例会が東京理科大学で行われた。今回の例会の内容は、森永貴子氏の新著『イルクーツク商人とキャフタ貿易—帝政ロシアにおけるユーラシア商業』（北海道大学出版会、2010年）の合評会であった。池田嘉郎氏が司会を担当され、私（塩谷）が評者を担当した。参加者は10名強であった。当日は二部構成を取り、前半で、私が森永氏の著書の概要を紹介した後に、内容に対するコメントを行い、後半で、参加者が著者の森永氏に様々な質問・コメントを寄せた。

まず、前半の概略をまとめてみたい。本書は、イルクーツクを中心とする地方史研究の範疇に分類されるが、通常の地方史研究の枠組みに止まらず、イルクーツク商人を露清貿易やロシア全体と関連づけることで、地方史の観点から、ロシア史を再検討する姿勢が伺える。イルクーツク商人が対象とする商品は、主に毛皮であったが、商品の経済循環（生産・流通・消費）の中では、とりわけ流通に焦点が当てられる。日本のロシア史研究において、森永氏の著書は、膨大な一次資料を駆使した叙述から構成され、ロシア商人史に関する本邦初の本格的研究と言える。イルクーツク商人の活動を、ロシアの国内市場に限定せず、国境を越えたユーラシア大陸の流通網に位置づける試みは、跨境史の可能性を示す。後半で、参加者から様々な質問・コメントが森永氏に寄せられたが、印象に残った内容を三点記しておきたい。第一に、従来なら商業史は、ロシア史研究において少数派に属する領域であったが、近年、この領域の研究が内外で活発になっており、森永氏の研究も、この研究動向に位置づけられる。第二に、露清貿易は単にロシアと清との商業関係を意味するのではなく、清の観点に立てば、戦争や紛争を回避するための安全保障の一手段でもあった。第三に、ロシアの毛皮はヨーロッパやアジア等、外国市場に輸出され、現地の消費者に利用されたが、史料等の制約条件から、外国市場における毛皮商品の消費の側面を叙述するのは困難だ、ということである。この例会の議論を踏まえて、評者（塩谷）は森永氏の著書に対する書評を準備しており、『ロシア史研究』に投稿する予定である。森永氏の著書に関心を持たれた方は、その書評を参考にいただければ幸いである。

<2012年度四学会合同大会の開催について>

スラブ関連四学会（ロシア・東欧学会、日本ロシア文学会、JSSEES、ロシア史研究会）の合同企画を2012年秋に開催します。現時点での確定事項と今後の課題をお知らせしますので、ご意見を委員会宛にお寄せください。ロシア史研究会の2012年度大会も、開催場所と日程を合同大会に合わせるようになります。

- 1) 主務学会はロシア文学会が担当し、開催場所は同志社大学を予定。
- 2) 日程は、三連休を前提とすると、10月6日（土）～8日（月）と11月23日（金）～25日（日）が考えられるが、後者の日程の京都は繁忙期となるため、前者案が有力。
- 3) 合同企画については今後、参加学会で協議します。ご意見、ご要望をお寄せください。

<各係りから>

1. 『ロシア史研究』編集部からの提案

会誌『ロシア史研究』における文献の表し方について、改革案を会員の皆様に提示したいと思います。論文の最後に通し番号を振って参考文献を並べ、本文中に番号と頁数を記載する形で

引用文献を示す現行の形式を、改めようというものです。これまでの形式は、ロシア語混じりの文章作成が困難であった時代の産物で、執筆者・読者双方に少なからぬご面倒をおかけするものでした。印刷所とも相談のうえで予定されている新しい様式は、一般にみられる註形式に則ったもので、本論を補足する説明と参考文献・ページ数等への言及をひとまとめにして、各論文の末尾に記載するものです。この改革案につきましては、既に編集協力者に基本案を示し、全員の賛同をいただいております。これを今年度の大会の総会でお諮りいただき、次次号から新形式にしたいと考えています。具体例につきましては、大会当日の受付に従来の方式と新方式の対照モデルを用意いたしますので、それをご覧いただき総会での審議にご参加下さい。

2. 『ロシア史研究案内』の進行状況について（『ロシア史研究案内』編集委員会）

1)前号でもお知らせしたところですが、『ロシア史研究案内』の準備状況についてご報告致します。出版社は彩流社との話合いで、2012年9月刊行予定としました。四六版、約300ページで、1000部から1200部を印刷、市販の予定です。その際ロシア史研の負担は90万となり、彩流社から300部の引渡しを受けることになります。会員全員に無料配布されますが、送料は委員会の負担となります。

2)第一部の「ロシア史研究の現在」ですが、研究動向のタイトルと執筆者15名については、以下のように決まりました。時代別として、中世の教会と国家(宮野裕)、18世紀末まで専制(田中良英)、近世の民衆運動(豊川浩一)、19世紀の農民(吉田浩)、帝政期の教育と社会(橋本伸也)、近代の都市と労働者(土屋好古)、革命前の農業(崔在東)、ロシア革命論(池田嘉郎)、スターリン時代(松井康浩)、フルシチョフ・ブレジネフ時代(松戸清裕)、ペレストロイカ(河本和子)、以上の11本です。テーマ別として、ロシア帝国論(宇山智彦)、ジェンダーと家族(広岡直子)、思想と文化(根村亮)、日露・日ソ関係史(富田武)、以上の4本です。タイトルは大雑把なもので、より相応しいものになる可能性があります。

3)第二部の座談会、第三部の資料集についても今後随時ご報告させていただきます。

以上の点については委員会のご了承をいただきました。今後とも会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

ロシア史研ニューズレター
第82号 2011年7月25日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学外国語学部
鈴木義一研究室気付
